

症例報告

高齢の患者と良好な関係を築くまでのプロセス

角 野 夢 子 鬼 塚 千 絵
永 松 浩 木 尾 哲 朗

抄録：我が国の高齢者人口が増加しているため、歯科を受診する高齢者の割合は今後、増加すると思われる。若い医療者は高齢者と世代が異なり、異文化コミュニケーション¹⁾の経験が不足しているため、高齢の患者と良好な関係を構築することに苦慮することがある。

今回、筆者が研修歯科医の時から4年にわたり担当している高齢の患者（担当開始時82歳）との関係性の変化を振り返り、よりよい関係構築へのプロセス（過程）について考察を行った。患者は義歯を多数所持しており、日替わりでつけ心地のよい義歯を上下の組み合わせに関係なく使用していた。筆者は患者の「咬む」ことへの考え方や義歯の使用方法に対して異文化と感ずることが多く、担当初期には患者の考えを受容できなかった。歯科医師として経験を重ねることで患者の置かれている社会的背景や心理的背景を考慮できるようになり、異文化と思われた患者の解釈モデルを理解して受容することで患者との関係性は良好なものへ変化した。若い医療者は、高齢の患者の価値観や言動を異文化と感ずることがあるが、アプローチを工夫することで良好な関係の構築が可能であることが示唆されたので報告する。

キーワード：高齢者 異文化コミュニケーション 解釈モデル 傾聴の技法 LEARNのアプローチ

緒 言

内閣府の平成29年版高齢社会白書²⁾によると我が国の65歳以上の高齢者人口は2016年には3,459万人で増加傾向にあり、約25年後には3,935万人でピークに達すると予測されている。このような背景から歯科を受診する高齢者の割合は今後も増加すると思われる。コミュニケーションにおいて世代や性別など価値観の相違が顕在化することを異文化とすると¹⁾、若い医療者は世代の異なる高齢者との異文化コミュニケーションの経験不足、高齢者の社会背景や生活背景の理解不足により高齢の患者と良好な関係を構築することに苦慮することがある。

筆者は研修歯科医の時には高齢の患者と接する際にコミュニケーションを上手く取ることができなかったが、経験を重ねるにつれて患者の解釈モデルや背景を理解できるようになり徐々にコミュニケーションが円滑にとれるようになった。そこで研修歯科医の時から4年にわたり担当してきた高齢の患者と筆者のコミュニケーションに焦点を当てて振り返り、術者である筆者の心境やアプローチの変化が患者との関係性の変化に及ぼした影響について考察を行った。

症 例

患者：初診時82歳女性。

初診日：2014年4月23日。

主訴：下の入れ歯が痛く、食べにくい。下の残りの

自分の歯は痛くはないが、黒くなったりかけたりしていて、むし歯になっているようなので治療してほしい（初診時）。

現病歴：現在使用している義歯は10年以上前に筆者の所属する病院にて作製された。2年前に他院で義歯を作製したが不適合によりほとんど使用していない。その間にも何度か義歯を作製したが、どれも不適合であった。

既往歴：特記事項なし。

現症：上顎は無歯顎で総義歯を装着。総義歯後縁は馬蹄形に削合されていた。下顎左側4番から7番、下顎右側4番から7番は欠損しており部分床義歯を装着。下顎義歯の右側のクラスプは切断されていた。下顎右側3番、下顎左側2番、3番にはレジン前装金属冠が装着されており、下顎右側2番、1番、下顎左側1番にはコンポジットレジンが充填されており、二次齲蝕が認められた。残存歯に関して自覚症状はない。初診時のデンタルX線写真画像を図1に示す。下顎右側2番根尖に骨透過像、下顎右側1番は残根状態で根尖に骨透過像、下顎右側1番は充填物下に齲蝕様透過像、下顎右側2番は歯冠部近遠心に齲蝕様透過像を認めた。

特記事項：患者は「使える義歯がなくなると困る」という思いを抱えており、過去に作製した複数の上下義歯を持ち歩いている。経過を追うために便宜的に義歯に番号を振った。それぞれの義歯の写真と患者の義